



アサルトファイター  
《フェニックス》



1

夏川 宙

# アサルトファイター《フェニックス》

## 第I章 人類の希望

### 1

「《ヒュージ・アイ7》（早期警戒機）が、敵ストライクフォース13を確認！ 本艦の2時方向・仰角16、距離5光分」

プロメテウス空母高速機動艦隊旗艦、軽空母《プロメテウス》の男性通信士官が、緊張をはらんだ声で告げた。

「了解した。——アサルトファイター《フェニックス》、単機で敵ストライクフォース13を強襲し、壊滅させよ！」

太い声で、プロメテウス空母高速機動艦隊司令官、ステイサー少将が、命令する。

「《フェニックス》パイロット、出撃準備を行え！」

と、落ち着いた口調で《プロメテウス》艦長、エステル大佐。

燃えるような赤い髪と碧眼を所有する、とても美しい白人青年女性である。

## アサルトファイター《フェニックス》

「了解！」

左手首に装着されたPDAの通話スイッチを押してそう言った、スターウインド少佐が、格納庫に隣接するレストルームから、足早にアサルトファイター（強襲戦闘機）《フェニックス》へ向かう。

ワイヤエレベーターを使って《フェニックス》のコクピットに長身をおさめた、スターウインドが、ワイヤエレベーター展開・格納ボタンを押してワイヤエレベーターを機体内部に格納し、視線を素早く計器類に走らせる。

彼は、人類国家連合宇宙軍の若き白人パイロットだ。

銀髪・パープル瞳の知的な顔と引き締まった身体を持つ、ハンサム。

「システムオールグリーン」

「レフトエンジン、ファイア（始動）」

「ライトエンジン、ファイア」

「ホイールロック解除」

スターウインドが、スラストレバー2本を、同時に心持ち前に倒す。

前進翼と2枚の垂直尾翼を有する、ブルーの《フェニックス》が、微速前進を始める。

《プロメテウス》格納庫内を少しの間前進し、真上にガイドアームが位置するポイントで停止した。

## アサルトファイター《フェニックス》

「ガイドアーム接続準備完了」

と、ガイドアーム接続準備ボタンを押して、スターウインド。

「ガイドアームを接続します」

若い女性カタパルトオフィサーが、美声を発した。

ガンメタリックのガイドアームがするすると降りてきて、《フェニックス》上部をガツチリとつかんだ。

わずかな振動を知覚中枢に認識したスターウインドが、コクピットパネルのガイドアーム接続灯がグリーンに輝くのを確認した後、端正な唇を動かした。

「ガイドアーム接続完了」

「発艦ゲートオープン」

《フェニックス》のすぐ先に位置する、ライトブルーの発艦ゲートが、瞬く間に開いた。

発艦ゲートの先には、無限に広がる星々の大海に向かって長く伸びる、カタパルトレールとその上方構造物——《プロメテウス》の細長い前部が見られる。

「《フェニックス》をリフトします」

ガイドアームが、《フェニックス》を持ち上げ始める。

「ホイール格納」

## アサルトファイター《フェニックス》

《フェニックス》のホイール3基が、機体の上昇と共に機体内に折りたたまれてゆく。

「——出撃準備完了！」

と、ホイールの格納、及び機体の上昇停止を確認した、スターウインド。

「《フェニックス》、任務は、単機でU1軍ストライクフォース13を強襲し、壊滅させる事だ」

と、燃える赤毛の《プロメテウス》艦長。

「了解」

「——《フェニックス》、出撃せよ！」

「了解！」

「《フェニックス》を射出します。——シュート！」

カタパルトオフィサーが告げ終わるや否や、《フェニックス》をつまんだガイドアームが、《プロメテウス》艦体前部を構成するカタパルトレールを、猛速で走り始める。

カタパルトレール先端部で、《フェニックス》がガイドアームから離断された。

スターウインドが、スラストレバー2本をクルーズ（巡航速度）の位置にいれる。

《プロメテウス》——ライトブルーの水平型スターシップ、及び複数のハリケーン級アサルトデストロイヤー、トラファルガー級イオンキャノンフリゲートからなる艦隊を背にした、《フェニックス》が、巨大な双発エンジン後部に煌めく青白い光を増光させ、

## アサルトファイター《フェニックス》

力強く加速した。

銀河系内に広大な星間国家——人類国家連合を築き、領域の拡大を続ける人類は、3年前、謎の知性体——UIに遭遇した。

UIは、人類に対して絶滅戦をしかけてきた。

両軍宇宙艦隊の規模・性能は、ある一点を除いてほぼ互角であった。

しかし、その一点が強烈だった。

驚くべきことに、UI軍宇宙艦のシールド強度は、人類軍宇宙艦の10倍を越えていたのである。

当然、人類軍は敗退に敗退を重ね、ついにその領域は開戦時の2割にまで減少し、もはや人類滅亡を待つのみかと思われたその時、人類軍の情報部が吉報を告げた。

それは、「UI軍艦艇は特殊なエネルギーを放射しており、そのエネルギーを利用することで、UI軍艦艇の強力なシールドを無効化する事が可能」という物だった——UIは、死亡すると体が消滅し、又UI艦艇の残骸内に存在するコンピューターなどにもその身体情報は全く存在しないため、UIの正体は全く分からないが、UIの領域やテクノロジーなどの情報はある程度得ることが出来るのである。

人類軍軍事戦略AI「アテナ」——スーパー量子コンピューター内の人工知能プログ

## アサルトファイター《フェニックス》

ラム——によれば、この特殊なエネルギーはUIの生命維持に関わる物であり、UI軍艦艇がその放射を停止する事は不可能とのことだった。

ただちに、人類軍は、UI艦艇のシールドを無効化する兵器、及びそれを搭載する軍用航空機を開発した。

それが、XASF05-Cn-3 // 試作アサルトファイター《フェニックス》である。

AUIMMP7-gxt-16-2d // 対UIマイクロミサイルポッド”4基(全てパージ可能)を主兵装とし、AUIBC5-n31-9-yc4 // 対UI218m連装ビームキャノン”2基、及びBV98-PF-3-72 // 31mmビームバルカン”2門を装備している。

対UI兵器はUI艦艇に対して極めて強力であり、前述のマイクロミサイルとビームキャノン弾は、戦艦クラス以下のサイズのUI艦艇を一撃で爆散、あるいは戦闘不能とする。

この対UI兵器の強さが、《フェニックス》が開発された最大の理由だ。

莫大なデータからアテナが割り出した、人類軍艦隊の基本戦術は、対UI兵器を装備した軍用航空機を軽空母に搭載し、その軽空母を高速艦艇で護衛する軽空母高速機動艦隊を編成して、遠距離から同艦隊でUI艦隊に航空攻撃をしかけるといったものであった。

## アサルトファイター《フェニックス》

これは、人類軍艦隊が攻撃を加えられにくい——敵艦艇の兵器（ミサイルランチャー、ビーム砲、実体弾射出兵器など）の射程外に位置しているため——、さらに人類軍攻撃部隊（軍用機隊）が損害を受けにくい——UI艦艇に対して通常の航空攻撃はほとんど通用しないため、人類軍がUI艦隊に対して空襲を行うことは滅多になく、UI艦艇の対空兵装は貧弱であるため——という点において合理的で、UI艦隊の攻撃によって激減した人類軍艦隊の現状は、まさにこの合理性を必要としていたため、人類軍最高司令部高官のほとんどがアテナのこの戦術を支持し、《フェニックス》の開発を行う事が決定されたのである。

一方、《フェニックス》の基本戦術は、ヒット・アンド・アウェイだ。

すなわち、UI艦隊に対して、遠距離から大量のマイクロミサイルで飽和攻撃を行い、討ち漏らしたUI艦艇へ中距離まで接近してビームキャノン砲撃で撃破し、UI艦隊の壊滅後、すみやかに母艦へ帰投するというものである。

UI軍軍用機の追撃をふりきるため、《フェニックス》には絶大なパワーを誇るTRSHYMBEG17—ccv2—619 超高出力マイクロブラックホールエンジン 2基が搭載されている。

《フェニックス》を搭載する軽空母《プロメテウス》の護衛艦として、複数のハリケーン級アサルトデストロイヤーとトラファルガー級イオンキャノンフリゲート——巨大



## アサルトファイター《フェニックス》

なイオンキャノン砲口を艦首に持つフリゲート——が選択された。

これらの艦艇が、《プロメテウス》を旗艦とする、プロメテウス空母高速機動艦隊を構成する。

操縦モードをオートパイロットに設定し、クラシック音楽で精神をリラックスさせていたスターウインドが、オーディオシステムの電源をオフにした。

特殊強化ガラス製のキャノピー越しに、見渡す限りの暗黒空間と美しく輝く星々を望見しながら、ふと、スターウインドは思索を始めた。

——敵ストライクフォース13は、空母を擁していない。

マイクロミサイルによるアウトレンジ攻撃とビームキャノン砲撃で、多分壊滅させることができるだろう。

だが、奴らはそれに懲りて、索敵システムを強化し、迎撃戦闘機を搭載した護衛空母・正規空母を艦隊に随伴させると共に、艦艇の対空・対ミサイル兵装の強化を図る。

特に厄介なのは、敵迎撃戦闘機だ。

人類軍もそれらを想定して、索敵システムの強化、護衛戦闘機の強化、新型護衛戦闘機の開発、強襲戦闘機（アサルトファイター）の強化、ステルス強襲戦闘機（ステルスアサルトファイター）の開発、対UI兵器の強化などを進めているのだろうが、楽観は

## アサルトファイター《フェニックス》

できん。

まあ、しばらくは、アサルトファイターが猛威をふるいそうだが。

この戦闘に生き残れたなら、以後の俺の戦いは、アサルトファイターと護衛戦闘機からなる、アサルトファイター隊 vs 敵艦隊直掩戦闘機隊 & 敵艦隊の構図となっていくだろう……

「まもなく、敵ストライクフォース13が、マイクロミサイル射程距離内に入ります」  
《フェニックス》の戦術量子コンピューター「タック」が、機械的な声で報告した。

「了解した」

スターウインドが、スラストレバー2本をバトル（戦闘速度）ポジションへスライドさせる。

機体後部の青白い輝きを急速に増した《フェニックス》が、人類の希望を背負って、闇の領域を突き進んだ。

## アサルトファイター《フェニックス》

本作品はフィクションであり、  
実在のいかなる個人・集団とも一切関係ありません。

アサルトファイター 《フェニックス》 1  
<http://p.booklog.jp/book/67519>

著者：夏川 宙

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/zcfzv5dyrd/profile>

感想はこちらのコメントへ  
<http://p.booklog.jp/book/67519>

ブックログ本棚へ入れる  
<http://booklog.jp/item/3/67519>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパバー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ